

「新潟の雪」と「雪の新潟」の謂れ

和泉 薫（新潟大学名誉教授）

1. はじめに ここでの「新潟」とは新潟市のことである。新潟市は、「雪国」新潟県の中でも一段と雪の少ない処として知られている。新潟における最深積雪の平年値（1981～2010年）は、36cmとスコップひと掻分くらいしかない。そんな新潟においても、時に大雪は降り、各種雪害も発生してきたこと、そのため越後の雪を代表して「雪の新潟」と謂われてきたことを報告する。

2. 新潟における大雪 2017/18冬期の1月11～12日に45, 39cmの日降雪があり、12日にはこの冬の最大積雪深80cmを記録した。このため交通に多大な障害が発生し、市民生活は大きな被害を受けたことは耳目に新しい。この80cmは、観測史上歴代11位の値でしかない。これを上回る近年の大雪は2010年2月の81cm（歴代10位）、1984年の87cm（歴代7位）で、過去に100cmを超えたのは歴代1位の120cmを記録した1961年（36豪雪）より以前に発生している。歴代2位の118cmは1896年1月に、3位タイの106cmは1895年1月と小氷期の影響の残る19世紀末に記録されている。

3. 新潟で発生した雪害 最大積雪深が120cmとなった36豪雪時の大晦日には、弱風型の着雪が起り下越地方の広域で停電被害が生じた。近年では2005年12月22～23日に下越地方を中心に強風型の着雪によって大規模な停電（新潟大停電）が発生し、36豪雪時に比べ電気に大きく依存する社会生活が大打撃を受けた。

最大積雪深87cmを記録した1984年（59豪雪）は低温多雪の冬で、路線バスが田んぼに突っ込む等、地吹雪による交通障害が多発した。この年2月に国道116号線で発生した低い地吹雪の状況を図1に示す。これを上回る地吹雪災害が発生したのが、最大積雪深81cmを記録した2010年2月である。81cmを記録した5日の翌日6日には-2℃前後の気温と10 m/s前後の風速が継続したため強い地吹雪が発生し、視程障害や吹溜まりに伴い、走行不能車両は約550台に及んだ。新潟市は海岸沿いに立地しているため冬期の季節風が強い。低温多雪の冬には地吹雪が発生しやすい。加えて、通勤に自家用車利用率が高いことから、地吹雪条件が整えば交通関係の甚大な障害が発生しうる都市となっている。一方、自動車交通がまだ発達していない19世紀末における新潟の雪害は、家屋倒壊であったことが官報の記事からわかる。新潟の下町で暴風雪のため数軒の住家が倒壊したが、古い木造家屋の屋根雪が偏荷重となって倒壊に至ったものであろう。

以上のように新潟ではこれまで豪雪地並みに様々な雪害が発生していることがわかる。

4. 新潟市章に雪環が入っている理由 豪雪地市町村の標章には、雪の結晶デザインを取り入れたものが多い。図2に示した新潟市章の、錨は港の意、漢数字五は開港五港の意、雪環は新潟（越後）の意、と市章制定時（1908）の説明にある。新潟市章に雪デザインが採用されたのは、豪雪地帯を多く抱える新潟県の県庁所在地であることだけでなく、市章制定の2年前に、「佐渡おけさ」の前身である「相川おけさ」が成立しており、その第3番は「♪ 雪の新潟 吹雪に暮れてよ 佐渡は寝たかよ 灯も見えぬ ♪」と歌われ、明治の頃は、新潟でも吹雪が冬の風物詩となっており、時には災害を起こしていたことも雪環デザイン採用に繋がったのであろう。平均的には雪は少ないものの、時には大雪の冬もあり、様々な雪害が発生してきた。

新潟は、やはり「雪の新潟」と呼ぶのがふさわしい。



図1 新潟市西区曾和 R116 (1984-2)

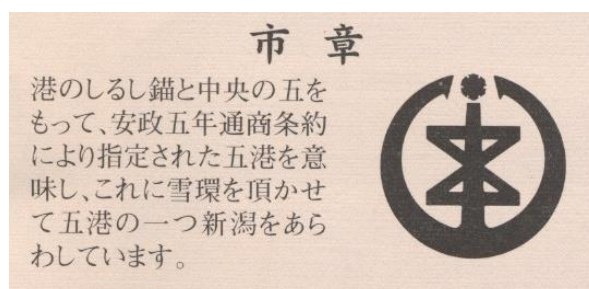


図2 新潟市章とその説明文